法人化後4年目の雑感、ある標語に思う

風間宏章　　図書館情報等支援室総務係長
（かざま ひろあき）

平成19年の夏は、各地で最高気温が軒並み更新されて記録的な猛暑でしたが、ここにきて例年並みの気候となり、日によっては冬到来を感じさせる肌寒さもあります。我が家から、筑波キャンパス春日地区まで約25キロ、マイカー通勤の距離としては全国平均値のようです。筑波山を左手に見て、平地林や水田が広がる茨城のよくある風景の中で職場に向かっています。

私の職歴では、春日地区を職場とするのは2度目となります。最初は筑波大学から図書館情報大学庶務課への異動で平成5年4月から6年間勤務しました。その後筑波大学に異動となって、法人化後の平成16年10月から図書館情報等支援室で勤務しています。この春日地区は、平成14年10月の図書館情報大学と筑波大学との大学統合という大改革を経て、多分落ち着く間もなく法人化となり現在に至っています。大学統合は歴史的な大改革事業であり、当時、両大学ともに統合に携わった方々の相当な労苦に改めて敬意を表すものです。

とにかく平成16年4月が法人化のスタートの年であり、今年でもう4年目です。法人化の直前や直後のときは、トップの判断で自主、自立の経営を行い、創意工夫で活性化などと、法人化で世界が変わるみたいな変にモヤモヤとしたものがありましたが、それから4年目ともなるとどうでしょうか。まだまだ走りながら考えるという状況が続いている感じです。

筑波大学全体をこの茨城の地にきた頃から、折々を通して見れば、本当は少し疲れてきたので、まだ疲れていなくても自らの足元や基本となる教育研究組織をじっくり見直して、全ての教職員の意識改革と工夫とで大学という場をつくろうという、本当の思うところに向けきれていないのではと感じます。

大学事務職員として見れば、一つ一つきちんと処理する日々の業務遂行と並行して事務手続きの簡素化、合理化、業務改善な

ど、法人化の有無にかかわらず、どれもが取り組むべきものですが、いざ実行というのができない。そんな感じが続いています。各種のメディアに出る大学関係の記事にもあるように、大学を取り巻く状況からは、明るい材料を見つけることが困難な状況ですが、ずいぶん昔からのフレーズでもあるように思います。しかし、今は次期中期目標・中期計画を意識し、国立大学法人という業界全体がとにかく走っています。「大学評価」、「大学改革」、「大学経営」等々のキーワードによる行動、いわば今の業務は、いずれ、高等教育研究、大学研究の研究者が答えを導き出し、法人化自体を整理していくことになるのでしょう。

そんな中で、9月下旬に開催された東京工業大学監事をされている富浦　梓氏を講師としたFD研修会「国立大学における業務改善のあり方と教育研究の活性化」が印象に残っています。講演要旨は「大学の危機」、「大学行政の変化」、「危機への対応」、「大学職員への期待」となっており、私にとっては、大変興味深い話であり、大学を取り巻く状況について簡潔明瞭でしかも法人化後の大学職員の目線でわかりやすい講演でした。講演を聴いて、変わらないものと変わっていくものの整理、そして、私の通勤途中にある中学校生徒の作品による家事・仕事をテーマにした標語「ひとりでやれば鈍行列車、みんなでやれば新幹線」の実行を改めて思った次第です。

まもなく学校関係では、本格的な入試シーズンの到来です。本学も新年度に向けた推薦入試も始まり、新年度に向けた行事が一つ一つ進んでいます。筑波大学を目指す受験生は、筑波大学に何かを期待し、受験したい大学だと思っています。受験倍率の動向は、真に社会の動きであり、筑波大学を外から見る本当の目です。4月には多くの学生が入学し、一定期間学群・学類や大学院に籍を置き、社会に出て行くこととなります。

この茨城に本拠地を構え、有力大学と伍していく筑波大学は、教育、研究、社会貢献を直接担う教員とそれを支援する大学職員とで本質の「しごと」をすることが重要です。真のミッションを共有・確認し、特に大学職員の人的資源を有効に確保・活用して、モチベーションの維持と本質を絶対見失うことのないようにすべきと思います。